

『サントスの御作業』と『黄金伝説』・その一

はじめに

本稿はキリシタン版『サントスの御作業』を、京都の人文書院発行の『黄金伝説』を参照しながら読んでみた結果について、概略的に述べるものである。

この人文書院発行の日本語訳『黄金伝説』^{レゲンダ・アウレア}について、福島邦道氏は『黄金伝説』と『サントスの御作業』(川口久雄博士古稀記念論文集『古典の姿容と新生』明治書院・昭和五九年)という論文で、その第一巻(昭和五四年)と『サントス』(以下、このように略称する)とを比較検討しておられるが、その論の冒頭で氏は、

——原典は、一書とは限定できないが、その主要な原典の一つとして、『黄金伝説』の占める位置は大きいものがある。

と述べられ、さらに、

遠藤潤一

——日本に将来された『黄金伝説』がどのようなものであったかについては、今後の追究を待ちたい。

と述べておられる。つまり、福島氏は『サントス』の原典の一つにヤコブス・デ・ウオラギネの『レゲンダ・アウレア』を考えておられる。しかし、筆者はそこまで考え及んでいないわけではない。だが、『サントス』の依拠原典に『レゲンダ・アウレア』の本文が比較的多く引用されていたということは多分に考えられることであると思っている。この間接的影響という意味において、『レゲンダ・アウレア』を原典に準じる存在としてとらえることはできるであろうと思っている。

さて、人文書院刊『黄金伝説』は前田敬作氏ほか四人(今村孝・山口裕・西井武・山中知子)の人々によって日本語訳されたもので、

全四卷である（第一巻―昭和五四年・第四巻―昭和六二年）。底本は左記の明治二三年刊のラテン語本である。

Jacobus a Voragine: *Legenda aurea*. Vulgo *Historia Lombardica Dicta*. Recensuit de Th. Graesse. Dresden 1890.

「凡例」を読むと、英語訳本・ドイツ語訳本・フランス語訳本と校合したとある。そして、その英語訳本は W. Caxton の訳本（二九七三年だそうだが、そのカックストン訳本はほとんど役に立たなかったと述べている。注目しておくべきことであろうと思う。

勉強社刊『サントスの御作業』（昭和五一年）の「解説」において、チースリク師は、「レゲンダ・アウレア」という書名は綽名であるとされるが、そのような綽名で呼ばれたということは、ウオラギネのその「聖人伝」がそれだけ人々にもてはやされたということ物語るものであろう。一四七〇年の版以降、数百年にも及ぶ重版があるそうである。^{注2}それ故、『サントス』がこの『レゲンダ・アウレア』の一版本を原典としたものではないにしても、間接的にはなんらかの本文の影響を受けているであろうことは容易に想像されることである。つまり、「引用」からの影響ということである。『サントス』の直接の原典ではないからといって、『レゲンダ・アウレア』を無視することはできないと筆者は思ふのである。そのようなわけで、身近な日本語訳本を用いて全体的に、概括的に比較検討してみることも意味が無いわけ

ではないと筆者は思ったのである。本稿の方法は、厳密に言えば、「隔靴搔痒」を免れがたいわけであるが、資料の性格・限界を意識し、それを前提として検討の範囲を縮めれば、かならずしもそうした欠点を克服できないわけのものでもないだろうと考へるのである。問題点の予測的・試掘的指摘なら充分可能かと思つてゐる。本稿の動機はこんなところにあるわけである。

ところで、『サントス』と『黄金伝説』とを全体的に比較検討すると、まず〔表1〕のような指摘ができるのである。『サントス』は勉強社刊の『サントスの御作業』（H. チースリク・福島邦道・三橋健）と、その『翻字・研究篇』（福島邦道）を用いたが、支障の無い限り、後者の福島氏の翻字本文に拠つた。

この〔表1〕について説明すると次のようになる。

『サントス』の方は話の出る順に従つて番号を付した。また、題名は簡略に記した。26以下はルイス・デ・グラナダの『信教入門』を原典としたもので、本稿の対象とはしない。表示してあるように、『サントス』の1から25までのうち、『黄金伝説』に見出せる話は二話となる。

『黄金伝説』の欄は、題名たとえば『使徒聖ペテロ』の下に、（2―84）と記して第二巻の第八四話ということを示した。この『第八四話』という番号は第一巻からの通し番号である。第一巻から第四巻までで一七六話となる。

次に、例を挙げて説明すると、たとえば『サントス』の「2・聖パウロ」が『黄金伝説』の「使徒聖パウロ」と内容的にどの

〔表1〕 比較対照表

番号	A・サントスの御作業	出典	行数	Bとの 対応行数	対応行 数の%	B・黄金伝説	行数	Aとの 対応行数	対応行 数の%
1	聖ペドロ・聖パウロ	(リ)?	一三二	二四	一八・二	使徒聖ペテロ(2―84)	三九二	二六	六・六
2	聖パウロ	(リ)	四一九	一九一	四五・六	使徒聖パウロ(2―85)	五二四	二三七	四五・二
3	聖アンデレ	ア	二四二	二二二	九五・五	使徒聖アンデレ(1―2)	三〇〇	二二二	七四・〇
4	聖ジャコブ	(ア)	二二五	九六	七六・八	使徒聖小ヤコブ(2―63)	二六七	七九	二九・六
5	聖ジョアン	(リ)?	二四六	二〇二	八二・一	福音史家聖ヨハネ(1―9)	二〇七	一四九	七二・〇
6	聖チャゴ	ア	二二一	一四六	六三・二	使徒聖大ヤコブ(2―94)	二八三	一二六	四四・五
7	聖トウメ	(リ)?	一〇七	八六	八〇・四	使徒聖ヒリポ(2―62)	二二一	一〇九	四九・三
8	聖フィリッペ	ア	五一	三六	七〇・六	使徒聖ヒリポ(2―62)	四〇	三〇	七五・〇
9	聖バルトロメウ	(リ)	八一	七三	九〇・一	使徒聖バルトロマイ(3―117)	二五六	八五	三三・二
10	聖マテウス	ア	八六	七一	八二・六	使徒聖マタイ(3―134)	一七四	六五	三七・四
11	聖シモン・聖ユダスタデウ	ア	一二六	一一七	九二・九	使徒聖シモン・聖ユダ(4―152)	二〇〇	一一三	五六・五
12	聖マチャスの御祝ひ日の談義								
13	聖イグナチオ	ア	一〇八	九六	八八・九	聖イグナチオス(1―36)	一〇三	八八	八五・四
14	聖フランシスコ	ア	四二二	一八〇	四二・七	聖フランシスコス(4―143)	四〇三	一八五	四五・九
15	聖ヘブローニヤ(女)								
16	聖バルラン・聖ジョサハツ	(リ)?	四四〇	三九三	八九・三	聖バルラーム・聖ヨサバト(4―174)	四二五	三二二	七三・四
17	聖エウスタキヨ	ア	二三八	二一九	九二・〇	聖エウスタキウス(4―154)	二〇一	一八〇	八九・六
18	聖ジョセフ(以下、巻第二)								
19	聖セバスティアン	ア	二〇七	一五五	七四・九	聖セバスティアヌス(1―23)	一六三	一三八	八四・七
20	聖カテリナ(女)	(リ)	三〇〇	二八八	九六・〇	聖カテリナ(4―166)	二七〇	一五八	五八・五
21	聖アレイシヨ	(リ)	二七三	二七三	一〇〇	聖プロクシオス(2―89)	一〇七	一〇六	九九・一
22	聖エウゼニヤ(女)	ア	三八四	三七七	七九・九	聖プロクシオス・聖ヒュアキントゥス(3―128)	九五	九三	九七・九
23	聖エステヴァン	(ア)	八一	六七	八二・七	聖ステパノ(1―8)	一八九	八四	四四・四
24	聖ロウレンソ	ア	一四九	一四三	九六・〇	聖ラウレンティウス(3―11)	四一八	一三七	三二・八
25	聖ヴィセンテ	ア	一一一	一〇九	九八・二	聖ウインケンティウス(1―25)	一〇七	九二	八六・〇

程度対応するかを示すための苦肉の策として、対応部の行数で示してみることにした。同一文脈での話の展開を追って、対応する内容を行数で示そうというわけである。粗筋的・文脈的な対応を視点とするわけで、記述の精粗の差は、この場合は問題とはしない。このような視点で検討すると、『サントス』の「2・聖パウロ」は、福島氏の翻字本文では全行数四一九行（二行三四字）となるが、その中の一九一行が『黄金伝説』の「使徒聖パウロ」と内容的に対応する。つまり、同一文脈の部分であるということになる。そして、対応行数は全行数の四五・六%を占めるということになる。同様に、『黄金伝説』の「使徒聖パウロ」の場合も、全五二四行（二行四五字）中の二三七行が『サントス』の「聖パウロ」と内容的に対応し、それは四五・二%を占めるということになる。このような方法で、まず対応度を示すことにした。これは、あくまでも便宜的な方法である。たとえば「21・聖アレキシヨ」は対応度一〇〇%となるが、それは粗筋的・文脈的な対応としてであって、記述の精粗の差においては、この話の場合ははなはだしいものである。

ところで、『サントス』の『黄金伝説』との対応行数の総計は、四五五九行中の三五〇三行となり、約七七%となる。また、『黄金伝説』の『サントス』との対応行数の総計は、五三四四行中の二八一三行となり、約五三%となる。また、六〇%以上の対応を示す話は、『サントス』では、3・4・5・6・7・8・9・10・11・13・16・17・19・20・21・22・23・24・25の一九話に

達するが、『黄金伝説』では、3・5・8・13・16・17・19・21・22・25の一〇話に過ぎない。

『サントス』の出典は、前述のチースリク師の解説によると、「リポマニ」「アントニノ」「ルイス・デ・グラナダ」の三つと見ても差し支えないとのことである。本稿の範囲では、「リポマニ」「アントニノ」の二つを出典と考えればよいということになる。右表の「出典」欄で「アントニノ」（ア）と略記と記してあるのは、『サントス』の話の表題において、「これサンアントニノの記録なり」（翻字で掲げた）ように記している場合である。また、「（ア）」と括弧して記した例は、チースリク師の解説で「アントニノ」としている場合である。一方、「リポマニ」（リ）と略記の方は、『サントス』では表題に「リポマニ」に拠ったと記している例は無い。それ故、すべて括弧して「（リ）」としてあるが、これもチースリク師が解説において「リポマニ」としておられることに従ったわけである。なお、「（リ）」と記した例があるが、それは筆者が推測で「リポマニ」としたことを示したものである。なにしろ、「アントニノ」でないものはすべて「リポマニ」ということになるわけで、そのチースリク師の基本的な考え方に従うと右のようなのである。（表1）は以上のような観点でまとめたものである。

なお、訳者について触れると、16・17・21・22の四話が養方パウロ（父）の訳で、あとはみな洞院ヴィセンテ（子）の訳である。

ところで、福島邦道氏は前記の論文において、『黄金伝説』の第一巻には『サントス』と対応する話が五つあるとされる。それらは〔表1〕の番号で挙げると、3・5・7・13・19である。しかし、筆者の比較検討によると、あと二話を追加することができる。それらは、23・25である。

なお、福島氏はその論文で、『サンジョアンの御作業』（表1の5）の中から「四方なる」という表現をとり上げ、『アルタルのそばにヨハウナル穴を掘らせ』とある例は、『黄金伝説』では、『祭壇のよこに四角い穴を掘らせ、』とあり、その「四角い」は「ヨハウナル」と対応すると述べておられる。そして、カックストンの英語訳本では「四角い」に対応する語が無いと述べておられる。^{注4}『黄金伝説』の前述の「凡例」におけるカックストン訳本についての言及は、こうした面を示唆しているのであろうか。

二

さて、『黄金伝説』を参照しながら『サントス』を読むと、以下のような表現上の対応例を拾い出すことができる。以下の例は筆者が特にノートしておいた約二八〇例の中からまず拾い出してみたものである。

例は、『サントス』の本文を、勉誠社刊『サントスの御作業』の福島邦道氏の『翻字・研究篇』の翻字本文で掲げ（振仮名を付し）、漢数字でその頁を示す。本文の上には前掲〔表1〕における話順番号と例番号を示すが、例番号は筆者のノートにおけ

るものである。たとえば「2—8」とは、「聖パウロ伝」における八番目の例という意味である。

次に、『黄金伝説』の対応本文を括弧に入れて掲げる。洋数字で巻と頁を示す。「2—381」とあるのは、第二巻の三八一頁という意味である。本文の——線部が表現上の問題として言及する箇所である。

興味深い対応例として、まず以下のような例を挙げることができる。

2—8 御首^{がん}を打ち奉りたる者の衣裳にまづ白き御血^{おん}飛びか
かりたるとなり。その後^{のち}に常の血流れたるとぞ。 (二二)

(彼の傷口からは、乳が流れて、刑吏の衣服にとびちり、
そのあとから血が流れだした) 2—381

翻字本文の「白き御血」は「白き御乳」なのではないかという疑問が生ずる。さらに、「乳」も「血」も共に「音節語」であり、ローマ字表記ではどちらがどちらであるか分からないので、「白き」「常の」という限定が必要となったのかというような疑問も生ずるのである。同様の例として次の例がある。

20—10 その場に見物するほどの者御血^{おん}の代りに白き血の流れ給ふを見、 (一九七)

(すると、彼女のからだから、血のかわりに乳がながれたした。) 4—332

なお、『サントス』には対応話が無いが、『黄金伝説』第一巻第三八話「聖ブラシオス」にも、

——体内からは、血のかわりに乳が流れてた。 1—39

という例がある。

2—11 ぶしの谷といふ所に首はなくして居らるる (二三)

(相棒だった男(ペテロ)といっしよに城外の戦士の谷に
ころがつてござるのさ) 2—382

唐突に「ぶしの谷」と出てきても何のことか分からない。だから、「翻字・研究篇」でも漢字を当てることができなかったのであろう。「黄金伝説」(以下、「黄」と略記する)との対比で「武士の谷」であることが分かる。

2—12 汝は終りなき死するの道をもつて死せんこと (二)

三

(永劫の死を受けなくてはなりません) 2—383

このような表現は、たとえば『ぎやどべかどる』に「終りなき死するの苦患に沈むべき者」(上34オ9)、「一大事の因縁となる終りなき道を聞き、」(上50ウ3)のような例がある。

2—14 すぐれたるトロンベタ、くたびれなきまことをあらはさるる談議者 (二三)

(鳴りひびく笛 疲れを知らぬ真理の伝道者) 2—385

この対比で考えると、「くたびれなき——談議者」となる。また、「まこと」は「真理」と対応するが、この意味の「まこと」は例が少ない。

5—6 まことの敵と、悪人との居所にゐて、風呂崩れて上

に落ちば、損たるべし (五一)

「浴場が頭のうえに倒れてこないうちに逃げなければならぬ。なにしろ、真理の敵ケリントスが入浴していたから」 1—142

この例などは(黄)との対比で読まない場合は「まことの」は「本当の」のような意味でとらえるであろう。

2—16 このアポストロは御生涯の限り皆殺され給ふなり

(二五)

(彼は、生涯に生きた日々の数だけ死んだのである) 2

1—389

2—18 我をば命の御札より削り給へ (二六)

(わたしの名前を生きながらえる人たちのリストから消し去ってください) 2—392

『ぎやどべかどる』に、「善人と等く終りなき一命の御札に記され奉る者也」(上63オ3)という例がある。

3—9 いかにクルス、謹んで敬ひ奉る、その故はゼズキリストの御身をもつて貴くならせられ、又、その御つがひを金玉をもつて飾りたるよりも飾られ給ふなり。 (二三)

(主のご聖体によつて清められ、主のおん手足によつて真珠のように飾られた聖十字架よ、どうか挨拶を受けてください) 1—46

3—11 いかに威勢まします御クルス、助け手の御つがひよりいつくしきを受け給ふが故に、 (三四)

(おお、やさしい聖十字架よ、おんみは、主のご聖体から
美と飾りを受けとりました。) 1-47

この3-9例の「その御つがひを」は、この文脈では「クル
スの縦木・横木の継ぎ目」という意味かと考えられる。しかし、
(黄)を参照すると、「主のおん手足によつて」とある。まず、
「御つがひ〓おん手足」についてだが、「つがひ」は「関節」と
いうことになるが、『どちなきりしたん』(慶長五年国字本によ
る)に、

「ごたいのつがひはたがひにちからをえ、しきしんのけつ
きをせんしんにくばるごとく、一さいのきりしたんいちみ
のところは一身の心なれば、えけれじやのつがひとなり奉
るがゆへに、 (25才15)

という比喩に用いられた例がある。同様の例は『ぎやどべか
どる』にも、

(Cristo)の全身の御番ひとなるきりしたんに対して
(上25才7)

の例がある。「つがひ」は「関節」の意であるが、このような
比喩の例から考えると、やや観念的に「肉体の節々」のような
意味で意識されているのではなからうか。そして、その「肉体
の節々」は、「ひじ」「ひざ」の意味でもとらえられたとすると、
たとえば「つがい」である「ひじ」を中心とした「腕」「二の腕」
をも「つがい」という語でとらえるようになり、その結果「手
足」までも「つがい」という語でとらえることができるように

なるのか。とにかく、(黄)との対比で考えればそんなことが考
えられる。

次に、「その御つがひを」が(黄)では「主のおん手足によつ
て」となっている点に注目しなければならない。3-11も同じ
趣旨の文脈であるが、そこでは「助け手の御つがひより」とな
っている。「御つがひを」は「御つがひによつて」の意の誤訳な
のではなからうか。なお、3-11では「御つがひ〓ご聖体」と
なるが、この「御つがひ」は先行する文脈3-9での訳出をそ
のまま受け継いだものであらうと考えられる。

3-14 アポストロの御棺より(この下に原文では「ワ」すなわち
「は」がある)小麦(の粉)のごとくに見えたるマンナと、香
ばしき油湧出すと人々沙汰せり。それをもつてその所の住
人、歳の飢豊を相しけるとなり。昔はその分なり。(三五)

(聖アンデレの墓からは、小麦粉状のマンナとかぐわしい油
とが流れでると言われている。土地の住民たちは、それに
よつて来年の収穫を知る。流れでる量がすくないと大地は
凶作をもたらし、豊かであれば、豊年になると言う。昔は、
そういうことがあったのかもしれない。) 1-49

このような、どうでもよいような部分がきちんと対応してい
る。なお、「小麦(の粉)」の括弧内「の粉」は「サントス」巻
末の正誤表で正とする部分である。

3-15 させらるることのはじめごとに、デウスと、このア
ポストロに対し奉りてこのことをすると宣ふかたぎなり。

(三五)

(な)にをするにあたつても、まず、「天主と聖アンデレの御名において」と言うのだった) 1—49

(黄)では「——の御名において」という慣用表現だが、「——の御名をもつて」という次のような例はある。^{注10)}

6—6 我今御大切に対して首を打たるナザレトのゼブスの御名をもつて、起き上りて、御作者へ御礼を申せ (五七)

「わたしは、いまイエス・キリストのために刑場へ引かれていくところだが、そのイエス・キリストの御名において命じる。さあ、しっかりとした足で立ちあがり、あなたの創造主をたたえなさい」 2—471

ただし、この「御名をもつて」は(黄)を参照すると、「御名をもつて命ずる」のような表現でなければならないのではないか。なお、「首を打たる」も、そこで文が切れるのか、または「首を打たるが」という意の表現でなければならないのではないか。

また、3—15の「対し奉りて」だが、他にも次のような例がある。

24—14 デシオが耳にも入るほどに、空中に声聞こえて、ゼズキリストに対し奉りて未だ大軍汝に残るとなり。 (二三)

(二)

(すると、天からひとつの声がデキウスの耳にもと聞いた。「ラウレンティウス、あなたに用意された戦いがまだ残

つています」) 3—156

この「ゼズキリストに対し奉りて」は訳出未熟の感がある。これは「ゼズキリストの御名をもつて命ずる」とはならないのか。

25—11 然ればその君に対し奉りてかくのごときの苦しみをこらへ給ふはかりましまさぬ天の帝王籠の苦しみをばグロウリヤに変へ、 (二三六)

(が、そのとき、この勇敢な信仰の戦士から苦悶の忠誠をささげられている王は、この拷苦を栄光に変えられた。)

1—278

この「その君に対し奉りて」はこのままでも意が通じるが、「その君(『天の帝王』の御名をもつて)でも通じる。なお、この例は全体的に訳出上の問題点が散見する。その部分を指摘し、手を加えてみると次のようになる(註点は任意に加えたもの)。

その君(『天の帝王』に対し奉りてかくのごときの苦しみをこらへ給ふを、はかりましまさぬ天の帝王(『その君』照覧せられ、籠の苦しみをばグロウリヤに変へ給ひ、

(黄)を参照するとこのようになるう。

4—10 ゼズキリスト、石は石の上に残るべからず、その故は我がビジサンの時節を見知らざればなりと宣ふなり (四三)

(城内のひとつの石もほかの石のうえに残しておかない日が来るであらう。それは、おまえが神のおとずれのとき

を知らないでいたからである」 2—161

この「石は石の上に残るべからず」は訳出未熟と言えるだろう。

6—3 我等に対して仇をなす者に良き事与ゆるために
(五七)

(悪には善をもつてむくいることにしよう。) 2—470

傍線部の「良き事与ゆる」はなんとごちない訳であるとか。「ぎやどべかどる」に、「人よりしかくべき仇をば恩をもて報ぜよ」(下47ウ)という例がある。

7—7 ゼズキリストの御誕生より十三日目に参拝仕られたる三人の帝王の国 (六六)

(おさな子キリストを拝みにやつて来た東方の三博士が
住んでいた土地) 1—92

「博士」という語があるのにそれを使わないのは、『日葡辞書』(邦訳日葡辞書・以下同様)のその語の意味に「呪術師、または、占い師。」とあるように、あまり良い意味ではないからであろう。次のような例から考えてもそう言える。

3—1 父母^{はかせ}これを見てかの子も博士^{はかせ}となりたと思ひ、
(二九)

(しかし、両親は、「息子は魔術師になった」と言つて、

1—39

16—19 その時代かくれなきテオダスと言へる博士^{はかせ} (二四
三)

(さて、テオダスという名の魔術師がいて、) 4—393

これは所謂「バルラン伝」中の例だが、バレット写本の場合は「博士^{はかせ}」でなく「外法者^{げほうしや}」となっている。^{注1)}「博士」魔術師」の対応はほかに例がある。

9—3 二十年以来衣裳も、靴もかへ給ふことなけれども、
いつも同前なり。 (七三)

(二十六年間おなじ衣を着、おなじ靴をはいておるが、古くなることもなければ、汚れもしない) 3—266

この「いつも同前なり」は「—なければども」との関係上、意味が通じない。(黄)を参照して、ああこのような意味なのかと分かるのである。訳出未熟と言えよう。

9—9 汝人の通らぬ所に行き、世の終りまで居よ、と宣ひて許さる(原文は「ユルサセラル」れば、) (七三)

(「さあ、だれも人間のいかなところへ行つて、そこで審判の日まで待つていなさい」こう言つて、天使は、いましめを解いてやつた。) 3—269

この「世の終りまで居よ」は意味が通じないわけではないが、(黄)を見ると、「最後の審判の日を待つて」という意味である。

そうすると、「世の終り」という表現にはキリスト教的ニュアンスが欠けるということになる。同様の表現として「ぎやどべかどる」に「世界の初めより世の終りまでの苦みを集て」(上38ウ)という例があるが、これも「最後の審判の日」の意味で使われている例ではない。

14—12 頃は霜雪の時分なるに雪のまるかせ大小七つまるかし、(二〇四)

(こんどはふかい雪のなかにとびだして、はだかのまま地べたに身を投げた。それから、大きな雪の玉を七つこしらえ、)

4—43

この「雪のまるかせ」だが、「マルカセ」は『日葡辞書』には無い。「マルカシ」があり、それには「雪の球などのように丸めたもの。ユキノマルカシ」とある。また、動詞「マルカス」には「ユキヲマルカス」という用例がある。『日葡辞書』でこのように「雪」の出でくるところがおもしろい。『サントス』のこの例となにか関係があるのだろうか。なお、古活字版『伊曾保物語』には「金のまろかしをかい子に産む」(下二五話)がある。

14—24 或るさむらひサントを振舞ひ奉らんとて、招待申さるるに、サント亭主に、いかに兄弟、我が異見の如くに先づ御身の科のコンヒサンをし給へ、その故は、今少しありて、御身は別の所へ振舞ひに行かるべしと宣へば、(二〇六)

(あるとき、聖人は、ある騎士から丁重に食事に招待された。彼は、その騎士に言った。「兄弟よ、わたしの言葉にしたがつて、罪の告解をしなさい。」と言いますのは、あなたは、まもなくべつのところで食事をすることになるからです。)

4—50

この「別の所へ振舞ひに」は誤訳と言ってしまってもよいだ

ろう。なぜならば、「別の所へ振舞われに」のような意味でなければならぬ、つまり、「天国の食事に招待されることになる」という意味にならなければ文意が通じないからである。

19—1 卿党(諸卿棟梁)数千人の大將なり (二七八)

(彼に第一歩兵隊の指揮権をあたえ、) 1—257

「卿党」と翻字本文にはあるが、「郷党」が正しい翻字と考えられる。一方、括弧内のように、『サントス』巻末の正誤表では「諸卿棟梁」と訂正している。前者との語意の違いが甚だしい。(黄)では「第一歩兵隊」で、これは意訳のような感がある。これらはみな意訳なのではなからうか。

19—7 天のプラネタのある所 (二八二)

(そこには天と星辰の運行が——かたどられています。)

1—261

19—9 そのほとけを崩し給へば、(二八二)

(その細工物が叩きこわされたとき) 1—261

「天のプラネタ」すなわち「プラネタリウム」のことを「そのほとけ」と言っている。訳出困難であったことがうかがえる。

19—11 その次にチブリシオを召し捕り、はだしにて燠の上を歩ませ申せば、かの人はクルスを唱へて、喜びを以て歩み給ひ、(二八四)

(その後、ティブルティウスも捕えられ、——彼は、十字を切ってから燃える石炭のうえを歩き、)

1—262

この「クルスを唱へて」という行為は、たとえば「どちりな

きりしたん』にある、

サンタクルスの御しるしを以てといふ一くをとなへてひとひにクルスをむすぶ也。(6オ10・「くるす」等は片仮名にした。以下同様)

という行為を意味しているものであろう。しかし、この例のような表現は『どちらなきりしたん』にも、

○くちにクルスをとなふる也 (6オ12)

○むねにクルスをとなふるなり (6オ13) のような例がある。

2-9 クルスの御印を唱へ (二三)

(聖なる十字を切り) 2-382

この場合も『どちらなきりしたん』に、

○クルスのしるしをつねにとなふる事 (6ウ1)

のような例がある。なお、例19-11の「クルスを唱へて」を、次のような例から見ると、「クルスの文を唱へて」の省略形と考えることもできるかも知れない。すなわち、「どちらなきりしたん」に、

○クルスのもんをとなへければ、 (7オ3)

○クルスのもんをとなふるがゆへに、 (7オ5)

等々。『ぎやどべかどる』にも、

○クルスの文を唱へさせ給へば (上49オ16)

がある。

11-13 かの^{ひた}人々の額にクルスを結び給ひてより (八一)

(額に十字を切つてもらうと) 4-1138

これは「クルスを結ぶ十字を切る」という対応の例。^{注13}

19-15 御^{おん}死骸をば汚穢^{おと}不浄を流す大きな溝^{みぞ}の中へ (二八五)

(死体を暗渠に) 1-263

死体を発見されないように「暗渠」に捨てたのであるが、その「暗渠」が訳出不可能だったのであろう。

20-3 牛の皮肉の間よりぬき出だしてほし固めたる筋^{すぢ}を集めて、それにて打擲^{うちなげ}させらるれば、 (一九三)

(さそり鞭で打たせたのち) 4-328

これは説明的な訳出か。

21-1 玉の指がねと帯の結び糸を赤き絹につつんで大切の御^{おん}しるしに渡し参らせられさまに、 (二〇二)

(金の指輪とベルトの留め金をあたえて、) 2-425

『日葡辞書』には「ユビガネ」はあるが、「トメガネ」は無い。21-7 或いはよこれ物の洗ひ汁、にこつて汚き水を御^{おん}ぐし

くだりへかけ申す (二〇四)

(汚ないゆすぎ水を頭にぶっかけるなど) 2-428

「御ぐしくだりへ」の用例は他に見出していないが、「御ぐし」は『日葡辞書』の「フタメ」の用例に、「ラングシノヒトフサフミノラクニアッタラフタメトモミモセラレズ」(平家巻二)、「ぎやどべかどる」に、「荊の冠を御^{おん}ぐしに押籠み奉る時」(下75オ10)がある。みな「頭髮」の意。念のために「ラグシ」は『日葡辞

書に、「尊敬すべき人の頭、または、頭髮。」とあり、「婦人語」という注がある。「ブングシ」は見出しには無い。

22—4 ヒイロゾホの名師なるプラトンの語合はせ、アリストテレスの論断、(二二二)

(アリストテレスの根拠論、プラトンのイデア論) 3—398

この「プラトンの語合はせ」とは何か、「語合はせ」とはどういう意味か。これは「プラトンの対話篇」のことではないのであるうか。翻字の「論断」は「論談」が適当であろう。¹⁵

23—8 恥をも知らぬ傾城の面を持ちて (二二五)

(彼らは、娼婦のように鉄面皮であつたので、恥じ入るどころか、) 1—125

このような対応例もある。

24—11 ヴアレリヤノも同心し、イッポリトもうけかかりて帰るものなり (二二二)

(ヴァレリアヌスは、それを承知し、彼の身柄をふたたびヒッポリュトウスにあずけた。) 3—155

この例は訳出不足の感がある。手を加えてみると、「ヴァレリヤノも同心し、サンロウレンツを引き渡し、イッポリトもうけかかりて帰るものなり」となる。『日葡辞書』の「ウケカカル」の意味は、「自分の身に引き受ける、または、保証人になる。」

24—18 あぶりこのごとくなる道具 (二二三)

(鉄の寝台) 3—158

「あぶりこ」とは、『日葡辞書』のこの語の語釈の中に出てくる「焼き網」のことであろう。

25—9 いかに毒舌 (二三五)

(おお、悪魔の毒をもつ舌よ。) 1—277

このような対応例もある。これは相手に対する呼び掛けの例。

25—10 その時ダシヤノ カバレテより取り除け火の苦しみを与へよと不知す。サンヴィセンテ大きに喜び給ひ、追放の武士をすすめ立て走り給ふなり (二二六)

(そこで、刑吏たちは、ウインケンティウスを拷問台からおろして、火あぶりの台につれていった。しかし、彼は、ひるむどころか、刑吏たちをいそがせ、なにをぐずぐずしているのかと叱りつけて。) 1—278

この「追放の武士」はただ「罪人を追い立てる武士」のような意味で使われている。『日葡辞書』で「ツイハウ」を引くと、「ツイハウノクワンニン」(追放の官人という例があるが、意味は「人を配流し、あるいは、領土外に追い出すことを役目とする人。')で、「配流」等のいわゆる「追放」の意味しか無い。

25—16 勝つ(勝たるる)こと叶はぬ者は、貴き大将の中にもなほ強き大将なり (二三八)

(雄々しい騎士、不屈の戦士よ、いまではどんなに苛酷な拷問も、勝利者であるあなたを怖れているのです) 1—2

括弧内は『サントス』巻末の正誤表で正とするもので、その

場合は「勝たるること叶はぬ者は——なほ強き大将なり」となるが、これは「だれからも勝たれることができない者は」「だれにも勝利を奪われない者は」という変な意味になる。それならば、「だれにも負けない者は」という意味の表現にすればよいものをとと思う。また、原文の「勝つこと叶はぬ者は——なほ強き大将なり」の場合は、「だれが立ち向かつて勝つことができない者は」「（そんな強い相手は）となり、正誤表で誤とするこの表現の方がむしろ難が無いと言える。なお、『日葡辞書』には「不屈」も「不敗」も無いが、「不敵」はある。しかし、意味は「高慢で押しが強い大胆さ。」で、「不敵な」も「大胆で横柄な。」である。

ところで、第16話すなわち所謂「バルラン伝」にはラープ古典叢書 (The Loeb Classical Library. 34. "Barlaam and Iosaph") という資料もあり、また、福島邦道氏の「写本聖バルラン伝」と題するバレット写本翻字本文もあり、比較検討に便利である。ここではバレット写本を加えての検討例を二例挙げてみよう。

16—7 やうやく夜を明かし御夫婦、御子達までうれひの衣（バレットうれひのくろも）を着して未明に参内ありけるなり。（一三七）

（朝になると、黒い服に身をつつみ、妻子をつれて、涙にむせびながら王宮の門のまえにやってきました。） 4—3

80

この「うれひの衣」はバレット写本の福島氏翻字本文では「うれひの黒裳」となっている。（黄）では「黒い服」であるから、「黒裳」はそれと一致するような印象を受けるが、この「黒裳」という語（？）が問題となろう。今のところ他に用例も見出せないし、また、どのような語義なのか。一方に、「くろも」の誤記で「くろも」となったのかという問題もある。また、（黄）の黒い服を「喪服」の意と解釈すると、「うれひのくろも」でもその意味は充分に伝わるということもある。^{注16}

16—18 ゲレシヤの国の者どもは昔の科人を以て本尊とす。

その故は、サツルノと言へる者は我が子を裂き食らふ、その上に（バレットその故に）玉茎を切て海へ投げ入れしかば、即ち（原文イスアナチ）女体と変じたるをエヌスと名付けて本尊と用ゆ。その子なるジュピテルをば手足を搦めて地獄へ落とすとなり。このジュピテルをこの世界に諸本尊原文（シヨホソン）の司とす。これ即ち他の妻を犯す為に畜類の体に生じ来たる（バレット生じたる）由語り伝ゆるなり。（一四二）

（ギリシアの人のあがめる神々とは、不埒なことをする悪人のことなのです。たとえば、サトゥルヌスがそうです。ギリシア人によりますと、サトゥルヌスは、自分の子供たちを食らい、自分の生殖器を切りとつて海に投げたところ、その泡からウェヌスが生まれてきました。その後、息子の子のユピテルにしばりあげられて、タルタスに投げこまれました）

た。ギリシア人は、このユピテルを神々の王者とよんでいますが、しばしば動物にばけて、わいせつ行為におよんだとも言われています。 4-391

まず、「その上に」であるが、バレット写本では「その故に」とある。これは「その故に」の方が良い。なぜならば、「その上に」であると、「我が子を裂き食い、その上に我が子の玉茎まで切り取って」ということになるが、「その故に」であると、「我が子を裂き食った故に、玉茎を切り取って」となり、この場合、「玉茎」は少なくとも我が子ではなくなる。「自分の玉茎」ということを示唆する表現となり、(黄)の場合と一致することになるからである。バレット写本の本文に従えば、バレットはこのような意味で解釈したと考えざるをえない。次に、「その子なるジュピテルをば手足を搦めて」は誤訳ということになる。「その子なるジュピテルに手足を搦められて地獄へ落とさる」という意でなければならぬ。また、「畜類の体」であるが、これも「しばしば畜類の体」でなければならぬし、そうすると、バレット写本の「生じたる」よりも版本の「生じ来たる」の方がどちらかと言えば良いかということになるだろう。

なお、土井忠生氏は「サントスの御作業版本の本文成立に関する考察」(『吉利支丹文献考』第七章において、「エウスタキオ伝」(本稿「表1」の17)を挙げられるが、その第四節「文章の出入」で次のようなことを述べておられる。

——先づ、写本になく、版本にのみ見られる文章がある。——その内容は次のやうなものである。父親は十五年間人の奴隸となつて樹木を育てる役をしてゐて、二人の子供がその近くにゐることも知らなかつた。また母親は船頭に奪ひ去られながらデウスの加護によつて難をまぬがれたことが述べられてゐる。

以上の点であるが、念のために版本『サントス』にのみある文章を(黄)と比較してみよう。本稿で今まで掲げてきた例はみな筆者の関心という点から筆者が選んで挙げてきた例であるが、これはそうではなく、土井氏の指摘なさる範圍の(黄)との対応がどんなかという観点で、参考のために挙げてみるわけである。

17-4 この身を育つるため、日々の営みを歎かて叶はぬ習ひなるに、この御仁体は流浪の御一人身なれば、いかんともし給ふべきやうなくして、終に人の奴となり給ひ、十五年を限つて、その間は樹木を育つるその役を受け取つて、つとめ給ふなり。二人の御子のまします所はほど近けれども、互ひに少しも知り給はずして年月を送り給ふ。(二四九)

(とほとぼ歩いていくと、とある村にやつてきた。彼は、ここで下男としてやとわれ、十五年間村人の畑の番をした。そのあいだ息子たちは、たがいに兄弟であることも知らず、にべつの村で育てられていた。)

三

「互ひに」は「父と二人の子」の間を指すのか、「二人の子」の間を指すのか、やや不分明なところがあるが、(黄)でははっきりと後者であることがわかる。土井氏の前掲部では前者で解釈なさっている。なお、この対応では、(黄)の方が内容的に粗く、粗筋的であると言えよう。次の対応も同様。

17-5 又御簾中の御上に新たなる御奇特あり。その身は人に奪はれ給ひて、しかも御姿比類なき美人にておはしけるが、デウスの御はからひなれば、アンジョ守護し給ふを以ていづくに何時までおはしますとも、いかでか御身に一微塵ほどの御けがれをも受け給ふべきや？これによつて御夫に別れ給へば、たちまちかの船頭は俄に深きつつしみ出で来、大に恐れをのき奉る。(二四九)

(主はまた、エウスタキウスの妻もお守りになり、例の船長が彼女の肌になれないようにはからわれた。船長は、あのあと頓死して、彼女をもとのからだのままあとに残したのである。) 4-153

筆者傍線部の内容上の違いに注目される。このような対応もあるのである。「簾中」は『日葡辞書』に「下(Ximo)では、貴人の妻の意。」とある。

なお、土井忠生氏はこの「写本になくて版本にのみ見られる文章」について、文章表現の観点から、省略の技法の有無という点で言及しておられるのだということを付け加えておこう。

以上、『黄金伝説』を参照しながら『サントス』を読み、目に留まった興味深い対応例をまず拾い出してみた。しかし、「興味深い対応例」という観点はいかにも主観的である。そこで、以上の四五例の性格を分析した傾向というものを最後に示しておこう(例は例番号で示す)。

(一) 生硬な訳出例(誤訳と思われる例も含む)。

2-12・2-14・5-6・2-16・4-10・6-3・9-3・9-9・14-24・11-25・16-16・18・(3-9)

(二) 右の(一)と似た面を持つが、特に訳者が訳出に困難を感じたかと思われる例(意味不分明となる例も含む)。

19-1・19-7・19-9・19-15・20-3・21-1・24-18・(以下、逐語訳と思われるが、意味不分明の点が生ずる例) 2-8・20-10・2-11・2-18・22-4・16-7

(三) 現代のキリスト教の表現である「――の御名において」、「十字を切る」をめぐる例、また、「博士」をめぐる例。

3-15・6-6・24-14・25-11・19-11・2-9・11-13・7-7・3-1・16-19

(四) 訳出に用いられた日本語に注目してよいかと思われる例。(三)と似た面あり。

3-9・3-11・14-12・21-7・25-10

(五) 意外な部分の対応例。

3—14・23—8・25—9

(六) その他の例(参考として掲げた土井忠生氏指摘箇所の例)。

17—4・17—5

以上である。

また、右の四五例は、「表1」に掲げてある第1話から第25話までの中の二二話(第12・15・18話は対応話無し)から万遍無く拾い出そうとしたものであるが、例の選択目的との関係で、どうしても偏りが生じてしまった(それはそれで、話の訳出態度という観点から見て意義のあることであるが、本稿ではそれに言及する余裕が無い)。まず、第1・8・10・13話は選択目的に合う例が無かった。第2話からが最も多くて七例、第3・19話からが共に五例、第16・24話からが共に三例となる。一例だけの話は第4・5・7・11・22・23話である。筆者のノートには、まだ挙げたい例、誤訳かと思われる例、他の観点から見て挙げたい例が残されているが、紙幅の関係上、それらについては他日を期すことにした。

なお、このような対応が指摘できるということについてどのように考えたらいのかということが大きな問題として残されているが、それについても他日を期すことにしている。しかし、今漠然と考えていることをとりあえず述べることにすると、それは本稿の冒頭で述べたようなことになる。つまり、『サントス』の原典(複数)にはウォラギネの『レゲンダ・アウレア』の本文がかなり多量に引用されていたのではないか、それが『サント

ス』の本文に投影しているのではなからうか、と推測している。

(未完)

注

(1) 続けて次のように述べておられる。「英訳本の序文で、エリスワの四書は、ウォラギネの編した『黄金伝説』は、一四七〇年と一五三〇年の間に、非常に頻繁に印刷され、それは無数のラテン語版であったと言っているが、その中のある版が恐らく日本へ将来されたものである。その翻訳は、一五六〇年代に大いに進み、一五九一年、加津佐版として定着し、これが西洋文字翻訳の事始の地位を得るに至ったものである。」

なお、福島氏は、村上直次郎氏訳『耶穌会士日本通信上巻』等に出てくる「聖徒の話」「聖徒の華」を『黄金伝説』を指すものとするというお考えである。そして、それに対する反対意見として、チースリク師の説を挙げ、それについて、「しかしながら、チースリク師は、『サントスの御作業』と『黄金伝説』との関連について、特に本文をくらべてはられないのであって、その点、実証的な裏付けには欠けているように思われるのである。」と述べられる。

また、福島氏は、『続キリシタン資料と国語研究』(笠間書院・昭和五八年)でも『黄金伝説』について同様の言及をしておられる。チースリク師の「聖人伝の歴史」の「原典」についての解説から筆者が要約して掲げると次のようになる。「ヤコブス・ア・ウォラジネ(二二八?—二二九八)。イタリアのジェノヴァ近くの生まれ。

一九二二年にジェノヴァの大神教。「聖人列伝」一二六四年頃成る。「黄金聖人伝」と題名される。一四七〇年に印刷。その後の重版は数百に及ぶ。」

(3) 注(2)に記したチースリク師の解説から筆者が要約して掲げると次のようになる。「聖アントニオ(二三八九—一四五九)。一四六四年にフロレンスの大神教。一四四〇年から一四五九年までのあいだに膨大な世界史を書き、歴史事件における神の摂理を読者に示そ

うとした。これには多くの聖人物語が含まれている。ヴェネツィア一四七四—七九年の初版、全部で一七版。一五八五年版の聖セバスティアンに日本語訳されたという注記あり。『リボマニ』(二五〇〇—一五五九)ヴェネツィア生まれ。一五五八年にベルガモの司教。共編『聖人伝大系』第一—五巻(一五五一—一五六六年、第六—八巻(一五五八—一六〇年)」。)

なお、原典については、アーネスト・サトーの『日本耶穌会刊行書志』参照。

- (4) この語については次のように述べておられる。「——かつて論じたように、「四角な」の意味の時は、「よほうなる」*rofinan*でなければならぬのが、「よはうなる」と誤っており、これは、『羅葡日対訳辞書』(二五九五)でも誤っている。——」。

- (5) 豊島正之氏編『キリシタン版ぎやどべかどる本文索引』(清文堂・昭和六二年)による。以下同様。

- (6) 『翻字・研究篇』の「原語一覧」には「軽口の人」とある。この例はそのような悪い意味で使われているわけではない。

- (7) なお、『日葡辞書』(邦訳日葡辞書・岩波書店。以下同様)には、「真理」はある。「シンリ。マコトノコトワリ。真実の理論、あるいは、道理」。

- (8) なお、参考までに言及すると、『日葡辞書』の「マカリタル」の用例の中に「ランフダ」(御札)が出るが、これは「立札」の意。

- (9) 小島幸枝氏編『どちらなりしん総索引』(風間書房・昭和四六年)による。以下同様。なお、同氏の「コスビリアル修行」の研究(笠間書院・昭和六二年)によると、『COSOS』(骨)の複数)を「御つがひ」と訳出した例がある。なお、『羅葡日対訳辞書』の「*cofrunco*」に、「キル、クロス、ツガイラハナス。」などの例もある。「*cofrunco*」は「首をはねる」という意であるが、それをも、「ツガイラキリハナス、*plumukroninas*。」としている。

- (10) 『日葡辞書』の「モッテ」に「ゼウスノミナモッテ」の例があり、「ラモッテ」に「デウスノミナモッテ」がある。「ライテ」にはこのような表現、つまり「デウスの御名において」のような例は無い。

また、「タイスル」に、「デウスニタイシタテマツリテ。デウスの愛にかけて、あるいは、デウスを導ぶ故に」がある。

- (11) 福島邦道氏「写本聖バルラン伝」(実践女子大学紀要第二九集・昭和六二年)による。

- (12) 拙著『伊曾保物語第二種本の翻刻と本文研究』(風間書房・平成五年)による。なお、『仮名草子集』(岩波大系)所収本文の森田武氏の頭注参照。

- (13) 『日葡辞書』の「トナユル」に、「クルスノモンヲトナユル」があるが、その意味は「クルス(十字架)のしるしをつくる」「十字を切る。」とあることに注目したい。また、「ムスブ」に、「インラムスブ(印を結ぶ)」があり、その説明に「ゼンチヨ *gentios* 異教徒」が習わしとしてするように、手でさまざまなしるしをする、または、儀礼を行なう。」とあり、「クルスを結ぶ」という例の出ないことにも注目したい。19—11例の「クルスを唱へて十字を切つて」の対応に改めて注目しなければならないと思う。

- (14) 第三卷一五六頁の割注によると、「逆鉤または鎖のついた鞭、拷問具のひとつ」とあり、「サントス」の訳出内容とは一致しない。
- (15) 福島邦道氏「写本エウゼニヤ伝」(実践国文学第三二号・昭和六二年)では「論議」となっている。なお、「プラトンの語合はせ」は写本でも同じ。平凡社の『世界大百科事典』の「プラトン」の項に次のようにあるのが参考となる(傍線筆者)。「——中期著作『費婁』『フィイドン』『国家』全一〇巻『フィイドロス』(パルメニデス)『テアイテトス』(ただし文体研究による区分とは別に、『イデア論的對話編』である前四者のみを中期著作と呼び、『パルメニデス』以降を後期著作とする場合もある)。」

プラトンの著作は、書簡集と『ソクラテスの弁明』を別にすれば、すべて対話編であり、ソクラテスの問答の過程を活写した前期著作や、そこに内包されていた可能性を積極的に展開させた中期著作では、ソクラテスがおもな話し手となり、また主題の内容が明白に実在のソクラテスを逸脱した若干の後期対話編では他の人物が主役の位置につく。——」(黄)の「イデア論」は、この「イデア論的對話編」ということになる。そうする

と、それと「語合はせ」が対応するということになる。

- (16) Loeb 古典叢書本の英文を掲げておく。「At day-break, robed in black and garments of mourning, with wife and children, he went to the palace gate, weeping and lamenting.」(P73) 筆者の線部は「黒い喪服をまこいて」となるが、『サントス』の「うれひの衣を着して」に合わせて訳出すると「黒い悲しみ(mourning)の衣をまこって」となりそうである。バレット写本の「黒裳」も否定しきれないか。

〈付記〉

本稿は福島邦道氏の高著高論に負うところが多い。ここに記して、感謝の意を表させていただく。本稿は国学院大学国語研究会の平成五年度前期大会において『サントスの御作業』の「一つの読み方」と題して述べさせていただいた拙話の前半部を基にして手を加えたものである。